

【大学生の部】

【前田純孝賞】

教わらなかつたことだけ上手くなるお洒落とゲームとヲタ活と嘘 早稲田大学 三年 五十嵐 紀子

【選評 佐々木幸綱】

この一首、大学を皮肉ったのか、大学生である自分たちを皮肉ったのか、どちらとも読めます。たぶん両方なのでしょう。「ヲタ活」という新語もうまくとりいれて、現代の大学、大学生のダメな部分をあえてクローズアップしてみせた怪作と読みました。

一昨年そして昨年はコロナの歌・マスクの歌が多くありましたが、今年はコロナ関係の歌は少ない印象でした。短歌は、自由詩とちがって、伝統詩です。西行でも、石川啄木でも、俵万智でもいい、少しは先輩の短歌を読んで下さい。

【準前田純孝賞】

ダンボールからゆらりと溶けだすふるさとの温度と匂い新聞の文字 青山学院大学 三年 新井 日向
憧れのフライトナース目指すため人込みの中電車に揺られる 川崎医療短期大学 一年 難波 志帆

【選者賞】

和太鼓の音聞くだけで思い出すまめをつくった三年間を 川崎医療短期大学 一年 渡邊 笑奈
口元が上書きされた顔ばかりマスクの下にかくれた八重歯 青山学院大学 四年 朝原 拓海
昼下がり優しい風に揺れているワイシャツみたいな自由がほしい 青山学院大学大学院修士課程 一年 小舟 萩

【新温泉町長賞】

病棟でバイトしながら考える未来の私どんな看護師 川崎医療短期大学 一年 芦田 愛瑠
ポニテする窓際であおぐ空の虹これからわたしのほどかれる夜 青山学院大学 四年 三井 らん
黒鍵のエチュード弾く右手にはいつも驚く華麗な動き 東京理科大学 四年 成田 大亜
ズームから初まり今は対面の授業となって卒業となる 頌栄短期大学 二年 玉井 あかり
夏空へ抜けだしたばかりの蝉らしく青銅（ぶろんず）の葉にいのちを点す 東京通信大学 四年 中田 光紀

【新温泉町教育長賞】

学割を使い倒せと向かうのは明日で終わる印象派展 熊本大学 四年 南條 理沙
ありもせぬ誰かの迎えを待ち望みバス停前に座る深夜2時 東北大学 一年 後藤 悠都
遊ぼうが飲もうになつて大人とは世界が狭くなっていくこと 名古屋大学 三年 小田 沙也加

憧れの母の背を追い看護師の道に踏み出す今が始まり 川崎医療短期大学 一年 小川 莉奈
何時からか世界は着色されていた！古写真に架かるモノクロの虹 青山学院大学 二年 上條 雄飛

【神戸新聞社賞】

夜空から押しよせる波クロールで泳げば行けそう満月のうえ 青山学院大学 二年 佐々木 美友
初めての棒針にぎりにらめっこ日に日に伸びてく白のマフラ― 大阪国際大学 二年 身野 光
わたし手が小さいんだ、と差し出せど重ねてこない手が弾くピアノ 大阪大学 二年 小池 ひろみ
草むらを臆せず進む君の背が遠くに感じた二十二の夏 筑波大学 三年 鴉田 佐季
はまかぜに乗って私は終点へ遠のいていく緑の景色 大阪樟蔭女子大学 三年 谷岡 美月